

「聞く・聴く」

北からの季節風が、日に日に強くなり、街路の木々も葉を落とし始めました。季節は着実に冬へと向かっています。

早いもので2017年も、いよいよ最後の月となりました。2学期は「行事の学期」と言われるように、運動会や音楽会等、さまざまな行事が目白押しで、慌ただしく日々が過ぎていった印象です。しかし、子供たちは各々の行事で自分の力を磨き、仲間と協力しあい、達成感や充実感を存分に味わうことができたのではないのでしょうか。もちろん、その陰には、職員が妥協せず、時には優しく、また時には厳しく子供たちの可能性を信じ続けた指導があったことは言うまでもありません。指導という言葉には、とかく教師が一方的に押し付けるイメージがありますが、きちんと子供たちの言い分に耳を傾けた上での指導であれば、それは実りのある指導になっているはずです。

私が若いころ、先輩教師に「大人は、子供の言うことを、ついつい『聞』の漢字みたいに聞いてしまう。つまり、構えの中に耳を入れてしまう。これじゃ、だめだ。同じ人間として『聴』の漢字みたいに聴かなければ。「十四の心」つまり、いろんな思いを持って聞いてあげないといけないよ。」と教えられました。

その時は、意味があまりよく分かっていなかったのですが、今、長い教員生活を振り返ってみると、とても大切なアドバイスをいただいたと実感しています。

大人と子供の違いはあれ、一人の人間として子供たちもしっかりと自分の思いを持ち、褒められたり認められたりしたいと願っています。また、失敗したときやいけないことをしたときは、叱られる前にきちんと反省もしています。そんな、子供たちの思いを推し量り、言い分をきちんと聴き、どういう言葉がこれからのその子供にいい影響を与えるかを考えて語るのが大人としての大切な役割だと思えます。

さあ、今年も残りあとわずかです。1年間頑張った子供たちをしっかりと認め、褒めてあげてください。そして、風邪やけがなどの健康面に気をつけ、穏やかな年末になることを心よりお祈り申し上げます。最後になりましたが、今年1年、本校教育に多大なるご協力を賜り本当にありがとうございました。来年もどうぞ宜しく御願い申し上げます。

校長 宮武 幹生